

をなし、此心的經驗が意識の中に止まり自己の思想や行動をも支配する所の内面的道德生活とならば感激教育が徹底的に其効を奏したと言はれるのである。而かも修身教授によりて正面的に説かるる場合よりも歴史教授の暗示的敎訓が永く青年の心理を支配することが少くはないのである。

最後に一言したきは青年は斯様に歴史教授によりて自己に關する意識を規定する上に又其徳性の修練の上に暗示を受くる間に史實として授けらるる所の事實の關係を考察し比較判斷の能力をも練ることが出来るのであつて、米國などに於ては千八百九十二年に國民教育會より中學校の教育調査の爲めに選任された十人委員の報告(Report of the Committee of ten on secondary school studies)にも精神の發達には觀察力や論理的の推理能力や比較判斷の力などの三方面の修練を要するが語學及理科は觀察の習慣を養ふに適し數學は推理力を發

達せしめ、歴史は比較判斷の力を養ふに好適の敎科である、政治家が歴史を研究するの之れが爲めであると説て、此點に於ける教育的價值を主張して居る。又シカゴ大學の教授ジャッドの近著「中學敎科目の心理」(Add-psychology of High school subjects 1914: p371-391)に於ても此れに類する意見を發表して居るのである、余輩も亦固より此種の價值を認むるものであるけれども是には主要なる價值に就て一言したのである。

輓近に於ける東洋史學の進歩 (上)

文學士 羽 田 亨

此の一篇は去る十月の史學研究會例會の席上で、現今西洋の東洋學者が一般に如何なる方面の研究に従事し、如何なる成績を擧げつゝあるかを、極めて簡単に述べたものに多少の

増補省略を試みたものに外ならぬ、元來本誌の如き専門の雜誌に掲載する積りはなく、たゞその席に集られた比較的、る學問には縁故の遠い方々に自分の知つて居る範圍内に於て近時の東洋史學研究の一面を紹介したに過ぎなかつたのを、編輯の方の要求によつてこゝに登載したものであることは、豫じめ讀者の諒奉を願つて置く。東洋史學の研究といふのは漢字で書いた外國の地名人名の類を還原するのが目的かといふ批難を聞いたものは、恐らく自分ばかりではあるまい、此の問題の重要なことは難者の想像以上にあることを疑はないがしかも現今斯學の進歩は、あらゆる方面に道を開いて、幸にかゝる難詰を受けるに及ばなくなつて居ることを、この短篇によつて幾分でも一般の讀者に諒解せらるゝならば望外の幸である。本篇に述べた所が全く西洋の學者の研究に止るのは、我が國の學者の寄與については、諸種の雜誌に於るそれぞれの紹介で、既に讀者の知悉して居られること、思ふからである。

一 東洋史研究の史料

從來東洋史といふ學問は支那の書物に據つて研究を進めるより外に途は無かつたといふても差支ない有様であつた、支那歷朝の正史に載せてある

外國傳、もしくはその他の記録に見えて居る外國に關する諸種の記事は、實に支那以外の東洋諸國の暗黒なる歴史を研究する場合には、最も重要な炬火であつて、これなくば古來文記の存して居ない此等諸國の史蹟は殆んど何物をも知り得ないものであることは、更めていふ迄もない次第である、こゝに於いて從來東洋史の研究に従事した西洋の諸學者で有名な人々は、揃ひも揃つて支那の歴史、殊にその外國傳、もしくは旅行記の類を、それ／＼の國語に翻譯したもので、支那に來て居た宣教師等はいふに及ばず専門の學者縱令ば佛蘭西のレミュザー (Remusat) とがジュリアン (Julien) とか、獨逸のクラプロート (Klaproth) とかいふ人々をはじめ、今日の學者も尙同様の事に従事して居る、たゞ後の人々は前の人々の翻譯を訂正し、或は前の人の仕殘したものを續々譯出して居るのである、尤も一概に翻譯といふても十九世

紀の半頃迄は主として譯述に止つて居つたが、漸次後になるに従つて種々考證を施し、それも益々密かになつて來て、現今の佛蘭西のシャヴンヌ(Chavannes)氏や、ペリオ氏(Pelliot)獨逸のHirth氏の如き精細を極める有様になつたのである併しながら此等の漢史の中に小器用に書き付けてある此等の記事は、たゞ一部一分を照らす炬火であつて、未だ全般の光景を映し出すに足る日光の如きものではないのである、換言すれば極めて粗漏で且つ誤謬に富んで居るものである、試みに一例を擧げて見れば、唐の玄宗皇帝が突厥の闕特勤(Khitagin)の紀行碑をその根據地なる蒙古のオルコン河域の地に建て、それが今日に傳はつて居るのであるが、漢文はその一面丈けで、爾餘の三面には突厥文字で此の人の戦功が書き付けてある、西洋の學者が辛苦を重ねてこれを讀解した結果によると、闕特勤はその四十七歳の生涯の中に

は、二度までもシル河を越えて今の露領中央亞細亞に侵入して居る、また突厥について蒙古の地に據つた回鶻でも、或る可汗はやはり軍を率ゐてシル河地方まで進んだことが、その毗伽可汗(Bilge Kagan)の碑文に記されてある、蒙古と中央亞細亞とは地理上甚だ懸隔して居るのみならず、途には大山沙磧などの難所があつて、行軍の如きは決して容易なことではなからうが、それにも係はらず、少しく勢力を得れば、かく一方から他方を侵略したことは、有名なる蒙古の成吉思汗以前にも既に屢々繰り返されて居る、たゞ支那の記録が斯る事まで委しく記して居ないだけのことである、思ふにかゝることは突厥や回鶻以前にもまた屢々演ぜられたことで、これからやがて東洋人種の西方移動といふ重要な事件を惹起したのであらうが支那の記録では勿論かゝることを明らかに知ることとは出來ない、此等のことは直接支那とは關係の

ないことであるから、縦令態々傳を立て、居るにしても書き洩らしたに不思議はないとしても、直接關係の存すること、縦令ば或る國の來貢したといふやうな出來事でも、書き記して無いのがある

また書いてあつてもその年次を誤つたり、事實を間違へて居るのも少くない、かゝることは別に支那の記録に限つた譯ではなく、何處の國でもその歴史を編纂するに當つては有り勝のことで決して不思議ではない。しかも往々此等の記事を楯にして縦令は何年には某國入貢の記事が無いから、その年には此の國との交渉は無かつたものであるといふ様に考へる人の少くないのは、此等の記事を過重視するものであつて、決して公平な觀方とは云はれない、書き示されてある事件については相當考察を加へた上で、正確な史實として扱ひ得るが、書き示されて居ないといふことは、決してその事件の絶對的に存在しなかつたことを示すもの

ではない、従つて此の書き洩らされた中の重要な點を補つて行くことが、即ち研究の目的でなければならぬ。

斯る次第であるから東洋史學の研究上支那の記録に見えて居る東洋諸國の記載は、極めて重要ではあるが、然もまた不完全至極なもので、只だ暗黒を照らす電光に外ならぬ、支那の記録が既に此の如くであるから、まして波斯、亞刺比亞、その他の諸國の記録に載せられて居ることは尙更零碎なものであつて、到底此等によつて多くのことを知ることは出来ない、故に此等の記録の外に別に確實な史料を拾集し、一方には從來傳へられてあることの確であるか否やを確かめ、一方には記録に洩れた新しい事實を探り出さうといふ努力が生じて來る譯である。

二 古代謠の發見

前世紀の末以來、重要なる學術上の探險が屢々

蒙古及び中央亞細亞の地に行はれたのは、全く這般の要求を充す爲であつた、此等の探險の結果は實に驚嘆すべきもので、これによつて從來主として支那史籍によりてのみ窺知するに過ぎなかつた東洋諸國の事情を、直接此等諸國の文記によりて研究し得ることになり、今日既にその結果の發表せられたものも少くない、併しながら此等の文記は殆んど皆今日に於ては廢滅に歸した言語を以て記され、その文字もまた或種類のものとは全く解し得ないものであつたので、之を研究の資料として用ゐる爲には、先づその言語及び文字の研究から始めてかゝらねばならぬ次第であつた、熱心な歐洲諸學者の努力は、遂に此の困難に打ち克つて、能くその鍵を握り得るに至つた、今先づかくして發見せられた古代の言語に就いて述べ、次に此等の言語文字で記された史料の研究の結果に及ぶことにする。

(イ) 古代トルコ語の發見。アルタイ語族即ちトルコ、蒙古、滿洲語族の間には、その何れについても、古い時代の言語の資料は極めて少く、十一世紀の半頃過ぎに回鶻語即ち一種のトルコ語で書いたクダック、ピリク (Kudakku Bilik) といふ書物が最も古いものとせられて居つたので、その以前の言語は如何なるものであつたかは、殆んど知り得なかつたのである、然るに一八九〇年に於るフィンランドのハイケル (Heikel) 氏の外蒙古オルコン河地方の探險、ついではその翌一八九一年に於ける露西亞のラドロフ (Radloff) 博士の探險等に據つて、前に一寸述べた突厥の關特勤の碑文をはじめその兄默棘連可汗、宰相噶欲谷、回鶻の毗伽可汗等の紀功碑文、その他多くの遺文を得たのであつたが、此等は隋唐時代のトルコ語なる突厥語、もしくはキルギス語などで記されてあつたので、少くとも從來よりは五六百年も以前に溯

つた時代のトルコ語なるものが明らかにになり、廣

い意味からいへば、アルタイ語の文獻をして、六

七世紀の頃まで溯らしむることとなり、言語學の

上に於ても大なる貢獻をなすことが出来た、尤も

此の突厥語を寫すに用ゐられた突厥文字或はエニ

セイ文字と稱せらるゝものが既に全くの新事實で

支那の記録には突厥には文字無しと記して居るも

のもある様な譯であるから、初めの中はこれを讀

むことが出来ず、或一種の模様に過ぎないと迄い

ふた學者もあつたのである、丁抹の學者トムセン

氏 (Thomsen) が一八九四年に初めて之を讀む事

を得、ラドロフ氏なども熱心に研究をすゝめて遂

に殆んど全く解明することを得たのである、然る

に別に能く知られて居る新疆省地方の探險の結果

更にまた多くの回鶻語の文書を獲ることが出来て

益々古代トルコ語なるものは明らかにせらるゝこ

とになり、アルタイ語の比較研究に資し得るに至

つたのである。

(四) 三種の印度歐羅巴語の發見。古代アルタイ

語の發見にもまして興味のある事實は、新疆省

地方の探險によつて、從來知られなかつた三種の

印度歐羅巴語を發見したことである、一はソグデ

イアナ語、二は獨逸ストラスブルヒのロイマン (

Leumann) 教授が假りに第一言語と稱し、伯林の

ミユラー (Müller) 博士がトカラ語と呼び、近

くは巴里のレヅイ教授が龜茲語、焉耆語と名付け

たもの、三はロイマン教授が第二言語といひ、他

の人々によつて東方イラン語とも呼ばれ、諾威の

ステン、コノウ (Sten Konow) 教授の于闐語と

稱して居るものである、此の中第一のソグデア

ナ語といふのは早くも紀元前六世紀時代に既にそ

の名を知られて居るスグダ (Suguda) 即ち今の露

領中央亞細亞のサマルカンド地方を中心として行

はれた古代のイラン語である、此の言語について

は以前から大分注意せられ、これで書いた貨幣の如きは、熱心に研究した學者もあつたが、然も此の國語で書いた文書經典の類の知られ、完全にその言語を研究し得るに至つたのは之を以て初とせねばならぬ、第三の所謂第二言語といふものも亦一種のイラン語であるが、しかもソグダイアナ語

とは餘程相違があつて、言語の構造なども壞れて居る所が多いといはれて居る、次に第二のトカラ語だが、トカラといふものは葱嶺の西方、今のアルム河域の地バルクを中心とした地方、玄奘三藏の觀貨羅と記してゐる地方で、元來此の地方に據つた民族の用ゐて居た言語と考へられて、ベルリンのミューラー (Müller) 博士によつて命名せられたものである、併しながら此の名が穩當でなく、實は龜茲語及び焉耆語と名付くべきものであるといふ説が一九一三年に巴里のレヴィ (Lévi) 教授によつて稱へられたことは既に本誌第二卷第三號

龜茲于闐の研究に於て述べて置いた如くである、此の言語のA Bの兩種即ちレヴィ氏の焉耆語及び龜茲語と稱するものは、共にイラン語でもなく、印度の言語でもなく、その特徴からすれば印歐語の中でも寧ろ歐羅巴の方のものに近似した珍らしい言語である。

こゝに便宜上少しく説明を付して置かねばならぬが、一體前世紀の半頃から非常な進歩をした印度歐羅巴語學に於ては、言語の分類に關しても非常に都合好く纏まりのついて居たもので、印度以西に於る同語族の間に八派十種の區別を立て、而して此の間に大きく東西の二大派即ちサテム語派とケンツム語派とを別けたものである、此の二派の區別は東西兩者の古語を比較して見ると、サテム (Saem イラン語の義)、ケンツム (Centum ラテン語の義) の語が示すやうに、一方でSの音をもつて居るものに對して他方ではKの音をもつて居るものが多

いといふ現象を基にして、東の派をサテム派、西の派をケンツム派と呼ぶことになつたのである、さて上に述べた新發見の結果によれば、此の八派十種語の區別は勿論變更しなければならぬのであるが、更に此の都合よく出来て居たサテム・ケンツムの東西兩大別をも亦變更しなければならぬことになつて來たのである、何故かといふに、一九〇八年に於ける獨逸のシーグ(Sieg)及びシーグリング(Siegling)二氏の研究によると、此のトカラ語(實は龜茲語、焉耆語)といふものは、他の東方印歐語と同様にサテム派に屬するものではなく、却つてケンツム派に屬するものであるからである、今試みに二三の數詞を比較してその實例を示して見る。

Kānti (龜茲語100); 希臘語 *κατά*, 拉典語 Centum, マシツク語 hund (h < k), 梵語 Satā, イラン語 Satem, スラヴ語 Sato, リタウ

語 Zintis
 Sākā (龜茲語10), Sakā (焉耆語10); 希臘語 Séxē, 拉典語 decem, マシツク語 tainun, 梵語 dāsa, スラヴ語 deseti, リタウ語 desimt
 Oktā (龜茲語) 希臘語 *ὀκτώ*, 拉典語 octo
 マシツク語 antan (h < k), 梵語 aṣṭā, aṣṭān, リタウ語 astuni

の如くである、即ち東の派なる梵語イラン語、スラヴ語などに現はれて居る S の音とは似ないで、西の派なる希臘語、拉典語、ゴシツク語等に見ゆる K の音と一致するものであることが明らかであらう、かくて前世紀以來歐洲の言語學者が苦心を重ねて作り上げた印歐語の分類が、夢にも思はなかつた支那領トルキスタンの砂の中から這ひ出した資料によつて、引っくり返されてしまはなければならぬ事になつたのは、何やら一種の皮肉の様に思はれる。

但だ斷つて置くことは、ロイマン氏の第一言語
ミューラー氏のトカラ語と稱したものの中のA
種を、レヴィ氏が何故に焉耆語と呼ぶに至つた
かについては寡聞なる自分は何等知る所ないの
である、たゞ前にも記した同氏の龜茲語の研究
の中に此のA種の言語は龜茲と雙生の國なる焉
耆國の言語即ちカラシヤールの言語であらねば
ならぬと述べてあるのを知るに止るのである、
もとより確かな根據のある命名であらうとは思
ふが、元來此の言語は初めから種々に命名せら
れたものでロイマン氏の如きも早く一九〇〇年
には露西亞の學士院の報告に之をカシユガルの
言語即ち疏勒語と呼び、後に之を更めて第一言
語と稱して確かな名稱の出るのを待ち、一九〇
七年にミューラー氏がトカラ語と名付けたので
あつたが(藝文第二年第四號拙稿漢譯の佛典に
就ての四七―四八頁參照)、その後も此の名稱

に定まつた譯ではなく、翌一九〇八年にも露西
亞のステール・ホルスタイン氏 *Stael Holstein*
氏はトカラ語なる名はロイマン氏の所謂第二言
語に付すべきもので、その第一言語はインドス
キテン語と稱すべきであることを、同年の露西
亞學士院の報告に於て論じ、一九一一年には諾
威クリスチャニヤのエミール・スミス (*Emil*
Smith) 氏は再び之を疏勒語と稱してロイマン
教授の舊稱に還し、更に一九一三年に前述の如
くレヴィ教授が龜茲語焉耆語と定めた譯である
此の中のB種の方を龜茲語と稱することの充分
道理あることは既に「龜茲・于闐」の研究に於て
之を述べて置いたが、焉耆語といふものに就て
はその命名の理由を知らないから、こゝに至る
迄の此の語の名稱の變遷を略述し、その命名の
容易でなく、従つて最も慎重なる用意を要する
ものであることを述べて置く。

(ハ) 西夏語の發見。西夏といふのは曰ふ迄もなく宋の時代に趙元昊の建てた國であるが、其の國語は有名なる居庸關の石刻を初め、涼州感通塔の銘文、敦煌莫高窟の名刻、三四の佛典、さては印章貨幣などに残つては居たが、之を書き記して居る西夏文字なるものが殆んど讀解せられなかつたからして、折角僅かながら殘存して居る言語も全く解釋を得なかつた次第である、然るに一九〇七年から二年に亘つて、蒙古から北部西藏にかけて露西亞のカヅロフ (Kozloff) 大佐の探險の結果、甘肅省エチナ(額濟納)河域のカラホトの遺墟から多くの西夏の遺物を獲得した、此の遺物は今露西亞の亞細亞博物館及び人種博物館に藏せられて居るが、その中西夏文字で書いた書籍文書の類丈けでも非常な數量に上つて居る、此の中に番漢合時掌中珠と題した漢語と西夏語との對譯辭書のあつたことは、從來不明に付せられた西夏文字及び西

夏語を知るに就ての重要な鍵となつた譯である、此の辭書は甚だ用意周到なものであつて、ある西夏語を西夏字で書いて對應の漢語を漢字で左側に並記し、漢字の左側には西夏字でその發音を示し前の西夏字の右側にはまた漢字でその發音が示してある、西夏の乾祐二十一年即ち一一九〇年に、骨勒なる人の編纂に係るものである、それで若し宋代の漢字の音を知ることさへ出來れば書中の西夏字を讀むことが出來、従つてその西夏語を知り得る譯である、それで露西亞のイヴノフ (Yanov) 教授は一九〇九年の露西亞學士院の報告に於て、此の辭書中から或る種の西夏語を撰び出して、發表したのであつたが、昨一九一六年には亞米利加に居る獨逸のラウフェル (Laufer) 博士は、同じく此の書を基にして西夏語の性質を研究し、これが雲南地方に居る獏々、磨些等の單綴語族の言語と甚だ近いと考へて、此等の三者の頭字によつて

Si-Io-mo group なる一團を區別し得ることを論ずるに至つた(通報第十七卷第一號)イヅノフ博士の研究もその後大に進むだぞ聞いて居るが、今日迄にはなほその結果の發表されたものを見ない、此の如くにして今日では此の言語も充分とは行かぬ迄も或程度迄は研究せられて、その性質も論じ得るやうになり、またその記録も漸次讀み破られやうとして居るのである。(未完)

平安朝神道の一側面

河野省三

平安朝は神祇制度が整頓し、本地垂迹説が成就した時代であることは、世間周知の事實であるが當時、神祇觀念が思想界に於いて如何なる活動を爲なし、神道といふ觀念が如何なる程度の成立を爲してをたかについては、餘り明になつてはをら

ぬ。最澄の著にかけられる山王神道書や、空海の述べたといふ兩部神道書や、或は卜部兼延の作だと稱する唯一神道書もあるが、何れも鎌倉時代の末期か、室町時代の色彩が濃厚なものであつて、其等によつて、當代の神道を窺ふ譯には行かぬ。從來、奈良朝時代に既に成立して居つたものと思はれてゐた本地垂迹説が、近來は當代の中葉になつて思想界を支配するやうになつたと云ふ事に信ぜられては來たが⁽¹⁾、さて其の完成された神佛習合説が如何なる組織の内容を有してゐたか、換言すれば、其の結果として如何なる神道の學説が成立したかといふ事については、殆ど研究されてをらぬやうに思ふ。

案するに、神道といふ名稱は、夙く用明紀に一ヶ所、孝徳紀に二ヶ所出てをるが、共に簡單なる觀念の表出であつて、後世言ふ神道のやうな複雑な組織的な概念を内容としてをるもので無いこと